

メコン河流域の開発、環境、生活、自然、援助を考える

フォーラム Mekong

メコン地域の人びとの暮らし・自然資源利用と「物語」 ～タイ・ラオス・カンボジアの民話・伝説についての調査と環境教育の取り組み～

メコン・ウォッチは、2014 年度からタイ・ラオス・カンボジア三か国の農村で伝説や民話を集め、それを活用した環境教育を実践する、「人びとの物語」プロジェクトを行っています。今回のフォーラム Mekong では、その概要と成果を紹介します。

プロジェクトの背景

川や森が育む自然資源に根ざした生活が営まれて来たメコン河流域では、自然にまつわる伝説・昔話・諺などが数多く伝えられています。こうした地域に根ざした「人びとの物語」は、次世代に自然資源と暮らしのつながり、つまり環境保全の大切さを語り継ぐ上で、大きな役割を果たしてきました。

メコン・ウォッチはこれまで、メコン河流域で人びとの自然資源利用についての調査や、住民参加型の資源管理の仕組み作りの支援を行ってきました。そのなかで、地域で有効かつ、より地域に根ざした資源管理を行うためには、地域の人びとが自然資源や環境をどのように捉えているのかを再評価し、同時に、地域の人びと自身が自分たちの言葉で資源管理について語り、環境保全を担う必要があるのではないかと考えるようになりました。

今、メコン地域では、農村部でもテレビやスマートフォンが急速に進んでおり、特に若い世代が伝説や物語に触れる機会がほとんど失われています。昔は、日が暮れば、たき火を囲んで長老や年配者が繰り広げる語りに耳を傾けることが常でしたが、現在の状況では、学校教育など他の機会を通じて学ぶきっかけを作らなければ、そういった機会は失われる一方です。

そこで、私たちは、これまで環境保全の分野ではあまり注目されてこなかった口承文学と自然資源利用の関わりに着目し、「人びとの物語」を記録したうえで、それらを活用して、地域の暮らしに基づいた環境教育を実践するという試みを行うことにしました。

タイ・ラオス・カンボジアの「人びとの物語」

メコン・ウォッチでは、タイ北部・東北部、ラオス北部・中部・南部、カンボジア東北部で、地域に伝わる伝説や民話などについての調査を行い、映像・音声・文字による記録を行ってきました。2014 年度には、3 カ国で 102 の伝説・昔話・ライフストーリーなどの「人びとの物語」を記録しました。そこには、アカ（タイ北部）、



ラオス南部チャムパサック県のトーラティー島での物語の聞き取りの様子（2014 年 9 月 8 日）

ブノン（カンボジア東北部）、イサーン（タイ東北部）、クム（ラオス北部）、ソー（タイ北部）といった先住民族／少数民族の言語による語りも含まれています。地域の歴史、慣習、信仰、自然資源に関する地域の知恵といった様々なテーマを扱った物語が集まりました。そこには、豊穡でときには厳しい自然、そして精霊とともにある人びとの暮らしを垣間見ることができません。私たちは、そのうち、15話と、それぞれの地域のアーティストによるイラストを掲載した英語のブックレット『木々と獣と塩と精霊～タイ・ラオス・カンボジアの農村の環境と人びとの暮らし』（原題：Plants, animals, salt and spirits: How people live with and talk about the environment in rural Cambodia, Laos and Thailand）を発行し、公開しています（※1）。また、メコン・ウォッチのブログ（<http://mekongwatch.cocolog-nifty.com/blog/>）では、いくつかの物語の日本語訳と解説をご紹介します。

タイの民話「パーデーとナーンアイ」と塩

このプロジェクトで収集された民話の一つに、東北タイのウドンタニ県で語られた王女ナーンアイとその恋人パーデーの悲恋の物語があります（コラム参照）。物語では、ナーンアイが白いリスに姿を変えたナーガ（龍）の王子を殺して食べてしまったために、ナーガの王の怒りを買って、恋人と引き裂かれ、都とともに地底に沈んでしまいます。この物語に登場する白いリスは、塩の象徴と見られ、ナーガの怒りによる大地の陥没は、岩塩が溶けて空洞のできた場所に起きる大規模な地盤沈下を表していると考えられています。こうした地盤沈下は、ラオスや東北タイで時々見られるものですが、この物語は現在、地下の岩塩の採掘と地盤沈下の関係と置き換えて語られています。

この物語の舞台となったウドンタニ県を含む東北タイの各地では、40件以上の工業用の炭酸カリウム採掘事業が計画されています。さらにタイ政府は、将来の原子力発電所建設計画に向

けて、炭酸カリウムを掘り出した空洞を、核廃棄物の処理場として利用するという調査を行っています。こうした計画に反対する地元の住民は、「パーデーとナーンアイ」の話を語ることで、地域のなかで資源の過剰な採取の危険性を訴えようとしています。

メコン・ウォッチは、この塩にまつわる物語や住民運動の調査を行っているタイ人研究者と協力して、現地で環境ワークショップを開催、また、タイの製塩をめぐる物語と人びとの暮らしに関するドキュメンタリーを作成しました（※2）。

「人びとの物語」を使った環境教育



物語の舞台となったノーンハーン湖（タイ・ウドンタニ県）

2015年度には、タイ・ラオス・カンボジアで収集した物語から1話ずつを使って、小・中学生向けに環境教育を行うための教材『私たちのまわりの物語と自然資源』を発行し（※3）、各国で活動するNGOや住民組織、小・中学校、児童館、研究機関等に配布しました。

ラオスでは、ラオス国立子ども文化センター（CCC）と日本のNGO「ラオスのこども（ALC）」の協力を得て、環境ワークショップを実施しました。一例として、2016年3月4日には、首都ビエンチャンから約200キロ、車で約3時間半ほどの距離にあるポリカムサイ県

パーデーとナーンアイの物語（注1）

語り：ターウォン・マノシン（2014年、ウドンタニ県プラジャックシラパカム郡タンボン・ホアイサムパット、ノンサー村）

昔々、キタナコーンという都にナーンアイというとても美しい王女がいました。ナーンアイの美しさはナーガ（龍）の都にも聞き及ぶほどでした。ナーガの王子パンキーは、ナーンアイを一目見ようと、白いリスに姿を変え、人間の世界へやってきました。

白いリスを見つけたナーンアイは、それが欲しくなり、召使いにリスを狩るよう命じました。狩人は国中の人びとにリス狩りを手伝うように知らせを出しました。

パンキーは、ナーガの召使いを鳥や蛇に変身させ、狩人に対抗しようとしたのですが、ついに撃たれて死んでしまいました。人びとは、死んだリスの肉を食べようと（筆者注：東北タイやラオスでは野生のリスは好んで食べられます）切り分けましたが、不思議なことに、切っても切ってもなくなりません。リスの肉は国中の人に行き渡りました。ただ、狩りに参加する男手がなかった未亡人を除いては。

息子の死を知ったナーガの王は怒り狂い、キタナコーンに兵を送りました。ナーガの兵は、白いリスの肉片を見つけると、その場所を破壊し、地面を陥没させました。

ところで、ナーンアイには、隣の都に住むパーデーという恋人がいました。ナーンアイの元を訪れたパーデーは恋人に、その日の夕食に何を食べたのか尋ねました。「リスのラープ（挽肉のサラダ）を食べたわ。金色のネックレスを着けたリスだったの」とナーンアイ。パーデーはナーンアイの身に何が起きようとしているか悟ります。「なんということだ。ここには危ない」。パーデーは、馬にナーンアイを乗せ、都を離れようとするのですが、ナーンアイが、指輪、ネックレス、銅鑼、ドラム、金を積み込んだため、馬は早く走ることができません。今にもナーガに追いつかれそうになり、パーデーは荷物を捨てるようナーンアイを説得します。

荷物を捨て、ようやく身軽になった馬に乗り、二人はもう少しで逃げ切れるところまで来ましたが、目の前に一本の大きな丸太が横たわっていました。馬はどうやってもその丸太を乗り越えることができません。なぜなら、その丸太はナーガが姿を変えたものだったからです。パーデーは逃れる方法を探ろうと、ナーンアイを馬から降ろし、「すぐに迎えに来るから、ここで待っていて」とその場に残します。パーデーがその場を離れたとたん、地面が崩れ、彼が見たのは、ナーンアイがキタナコーンの街とともに水に沈んでいく姿でした。

キタナコーンの街があったところは、今はノーンハーンと呼ばれる大きな湖になっています（注2）。ノーンハーン湖にところどころ島が見られるのは、リスの肉の分け前をもらえなかったために難を逃れた未亡人が住んでいたところだと言われています。また、周辺には「ホアイナム（小川）・ゴーン（ドラム）」や「ノーン（沼）・ウェーン（指輪）」といった物語にちなんだ地名が残っています。

（抄訳：メコン・ウォッチ）

（注1）実際に語られた物語は、パーデー、ナーンアイ、パンキーの前世に起こったナーガ（龍）の戦いから始まる壮大なお話です。本稿では物語の一部を抄訳で紹介しています。

（注2）この話が語られたウドンタニ県以外にも、東北タイの各地にノーンハーンという名の湖沼が点在しています。

パッカディン郡のボンサイ小学校の生徒を対象としたワークショップを開催しました。CCCのベテランスタッフが、ラオスの先住民族クム族に伝わる『フクロウとシカ』の物語（<http://www.mekongwatch.org/PDF/FM11-1kamstory.pdf> を参照）を語り聞かせた後、「私たちの村にも物語に出てきた動物がいるかな?」「象はどこに住んでいるの?」「森がなくなったら、動物たちはどうになってしまう?」といったファシリテーターの問いかけに、子供たちは元気よく答えてくれました。クム民族が90%を占める同小学校では、物語に出てくる実在・架空の動物になじみがあり、物語は身近な自然環境の変化を考えるきっかけになったようです。



ラオス・ボリカムサイ県ボンサイ小学校でのワークショップの様子（2016年3月4日）

また、2016年3月には、タイのウドンタニ県で、タイとラオスの教育関係者、環境団体のスタッフ、物語の語り手を含むタイの地域住民、タイの小学生と教員などを招いた国際ワークショップを開催しました。ワークショップでは、小学生を対象に物語を使った環境教育のデモンストレーションを行った後、物語を活用した環境教育の可能性についての議論が行われました。参加者からは、テレビや携帯電話が普及する昨今、地域に伝わる物語が次の世代に受け継がれずに消えて行くことへの危機感、環境教育に物

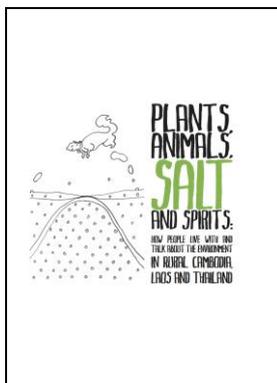


タイ・ウドンタニ県で開催された環境教育ワークショップで行われたデモンストレーション（2016年3月10日）

語を取り入れることへの期待が共有され、「今の子どもたちには、語りだけよりも映像を使った方が受け入れられるのでは?」「パネルシアターを使ってみては?」といったワークショップの方法についての意見交換も行われました。

メコン・ウォッチでは、このプロジェクトを通じて、自然資源の最も近くに暮らす地域住民の資源利用のあり方が、各国の開発・教育政策において尊重されるようになること、また、メコン河流域の人びとが政策決定者に対して、自らの言葉で環境との関わりや直面している問題を語れるようになること、に貢献することを目指しています。

※ 本事業は独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成(2014年4月～2016年3月)及び日本財団API Collaborative Grant(2014年8月～2015年1月)を受けて実施されました。(記事中の見解は、当団体のものであり、基金・財団とは関係はありません。)



このプロジェクトで制作したブックレット、ドキュメンタリー、環境教育教材は、以下から視聴・ダウンロードが可能です。ブックレットと環境教育教材のハードコピーをご希望の方は、メコン・ウォッチまでお問い合わせください。

(※1) ブックレット『木々と獣と塩と精霊～タイ・ラオス・カンボジアの農村の環境と人びとの暮らし』（英語）

http://www.mekongwatch.org/PDF/Booklet_PeopleStory.pdf

(※2) ドキュメンタリー『ポーカムデーの塩』

https://www.youtube.com/watch?v=F_Mu3nRsL-A

(※3) 環境教育教材『私たちのまわりの物語と自然資源』

タイ語版 http://www.mekongwatch.org/PDF/PeopleStory_Thai.pdf

ラオス語版 http://www.mekongwatch.org/PDF/PeopleStory_Lao.pdf

クメール語版 http://www.mekongwatch.org/PDF/PeopleStory_Khmer.pdf

特定非営利活動法人メコン・ウォッチ

〒110-0016

東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3 階

Tel: 03-3832-5034

Fax: 03-3832-5039

E-mail: info@mekongwatch.org

Website: www.mekongwatch.org